

「ひとりでは生きられないのも芸のうち」

内田 樹／著

文藝春秋 2008年1月発行

2階一般開架図書（請求記号：914.6／ウチ）

近頃ニュースを見ていて、シンプルな喜怒哀楽よりも<やりきれない>とか<うんざり>といった心持ちになることが多くなったと思うのは私だけだろうか。食品偽装然り、教員汚職然り。心の中で呟く、「なんで世の中こんな有様になってしまったんだろう、(誰のせい!?)」。さて、()の言葉を思い浮かべたあなた、その心の叫びも原因の一つかもしれません。

神戸女学院大学教授である著者のブログからうまれたこの一冊。なるほど、と納得の部分もあれば、ちょっとしっくりこない部分もあるけれど、この一文にはウツと詰まった。

「世の中が全部『自分みたいな人間』ばかりになったときにでも愉快地に生きていける」生き方をしているかー

あなたは「YES!」と答えられますか？

「人間教師 生活綴方の父小砂丘忠義」

竹内 功／著

高知新聞社 1998年1月発行

2階郷土開架図書（請求記号：K289－ササ）

本書は、小中学生対象の作文の賞「小砂丘賞」が創設されるきっかけとなった、作文教育の先駆者小砂丘忠義の伝記である。

学校の宿題の作文とか読書感想文とかいうと、お仕着せの型にはまったつまらないものという印象が強いんだけど、本書を読めばその印象が一変すること間違いなし。師範学校卒業集合写真にカメラに背を向けて収まった彼の姿が象徴するように、小砂丘が目指した教育とは、上からの押し付けを疑い、型にはまらないものだった。

子どもへの無条件の愛情に裏打ちされた小砂丘の生き方は、教育の根っこがぐらついている現在こそ、あらためて見直されるものではなかろうか。